東播センター合唱団機関誌

第47号　2008年4月11日

発行　東播センター合唱団 機関誌部
http://homepage3.nifty.com/oskyiuenk/

「全国うたごえ創作合宿 in 岡山」に参加して

“作った以上、そのように生きろ、うたえない歌は作るな”

てんやわんや記　　坂田月代

2月22日(金)から24日(日)まで、2泊3日の“合宿”に、西本団長と2人で参加してきた。“合宿”という言葉すら懐かしい。2人とも初参加で、新鮮だったがハードで帰ってから2日間、私は眠り婆となった。全国の北は北海道から、南は九州まで、53名の参加32曲の歌が新たに生み出された。年齢構成は30歳代～70歳代とおぼしい。西本団長の深長な言動、私の大胆不敵な様子は対照的で、ヤジキタコンビだった。笠木透と雑花塾のメンバー4人のコンサートとトークは、過去から未来を見通し、爆笑とうなずきのくり返しで、うたごえ運動に大きな励ましとなった。

シリーズ3回で、詳しく紀行文風に、団員の皆様へお伝えしたいと思う。

シリーズⅠ

－　出発から、第一夜まで　－　　～はじめてのプロ集団との出会いと交流～

22日(金)、午後2時半頃、野口を出発。一路岡山めざし、無料道を西へと進む。わりとスムーズに赤穂を通過、やがて岡山の牛窓からブルーラインをスイスイと行く。途中、トイレ休憩。私は人参、蓮根、みかん、デコポン等、買い求めた。間食後、再び出発。西本号はカーナビに案内されて、4時半頃に目的地、山陽ハイツに到着した。早々と受付をすますと、私はさっそくおみやげコーナーで孫や家へのみやげ物を購入。ここで「誓い」の高田氏に逢った。ハンサムで人なつっこい笑顔。

「高田龍治さんですよね」

というと、ニコニコうなずいた。西本さんは知った人と話しでもしていたか、解らない。

資料を確認。西本さんは一番うしろのすみっこに座っていた。私はもっと前へ行こうと言ったが、ここで良いとの返事だった。西本さんは「ささゆりの道」の発表に小声で、準備。私は自分の本たちの売り出し準備へ。

作ってきた歌たちの発表がスタートする。3番目に「ささゆりの道」を発声練習パスで、西本さんが歌った。伴奏つきでいつものテナーの少し小さい声量。拍手。我田引水よろしく、私も大きな拍手。次々と歌と歌詞の発表。いつ終わるともなく続く。笠木さんらは現れず、ふり返ったら、来ていた。リハーサルもあろうし、早く来られていたのだろう。予想通り大男だ。いかつい顔に、茶色のガウンとズボン姿。オシャレに

マフラーを同じ茶色系統にまとめているのが、シンガーソング、ライターらしいと私は思う。

多忙と歯痛で、コンディションが悪いと話し始める。歌うと迫力がある。アコーディオンの忠(ちゅう) ヤンは 70 歳代かな。伊藤せいごうはおかっぱ風、男か女かとわかりにくいが、名前から男と判明。ギター2 本の 4 人でも狭い会場は熱気でつつまれている。「夜明けを告げる子どもたち」

歌とトークで、＜うたった以上そのように生きろ。できないことは歌うな＞の始まり。

チューター、アドバイザーは山本忠生、新江義雄、高田龍治、藤村記一郎（「ぞう列車がやってきた」でおなじみの作曲家）木村泉、安広真理（「その手の中に」の作曲者。ピアニスト）の援助入りで、歌とトークは続く。歯痛に苦しむ笠木透さんへ、私は持参の花束を早々とプレゼントした。

「歯痛(はいた)にきくかも。」

と言うと会場は笑いがおこった。笠木さんは日本ずいせんとバラの花束を立てて、香りを楽しみつつ、話し歌った。

6 時から夕食。西本さんはまじめに、ビール抜きの食事。

「9 時から交流会やから、その時にアルコールを」

と説得されて、私もがまん。7 時頃から実作発表会の続き。そして、まだまだという時、机を並びかえて、交流会の始まり。そのあい間に、本と CD を購入。私の本も「天使の素足(はだし)」（詩集）が売れる。

「消費税は反対ですので、取りません。サーヴィスしますよ」

と、本の販売、交流を続けた。話し合いは延々と続く。笑い声や親睦で、気がついたら、シンデレラ・タイムをこえている。

「今日は風呂はダメね。」

「11 時までやった・・・・」

と話し合い、北海道のホッケのヒモノや牛肉の脂肪をとった残り肉、すぐきのつけものなど、おいしく頂き、減量は明日から・・・・と私もほろ酔い、西本さんも笑うようになって、夜はふけていった。

シリーズⅡ

ー　充実の２日目　ー

私は朝５時前に起きた。体が覚えていて、のどの渇きを持参の還元水でうるおし、6 時前の風呂場へゆっくりと移動する。群青(ぐんじょう)の空から、うすいブルーへと夜明けが近づく頃、風呂は大浴場にひとり。こんなぜい沢はめったにないと、発声練習や、歌詞をくちずさみ体操、水泳を楽しむ。“独占湯”からあがり、体重計におそるおそる乗った。

「あれっ、やっぱり」

入る前より 1kg の減。感心する＜人間丈夫な内は動くように出来とんやなあ＞と一人納得。

7 時半からバイキング方式の朝食をたっぷり食べて、いざ 9 時半からの、笠木透、特別講座を聞く。昼前に終り、昼食は親子丼、ここで、少し西本さんに食べきれない分をふたにとりわけておいて、食べてもらった。西本さんは花粉症か。しかしよく食べて元気をとりもどす。私も風邪が少し快方へむかう。

いったい、いつ歌を創るのだろう・・・・と不安になる。スケジュールによると、今夜はエンドレスと書いてある。詩集「天使の素足(はだし)」は5冊完売。あと、「月代物語」と「手前味噌パートⅢ」が残っている。

笠木さんの講演は熱が入り、3時を過ぎて拍手喝采。サインセールに、写真撮影と忙しい。私もサイン入りの拙書をプレゼント。懐かしい、我夢(カム)土下座(ツゲザー)の間宮亨（日福大、大池ゼミの同窓生で友人）でギター付、作詞作曲者兼、小学校教員の事を笠木さんに話す。もう帰られる時刻となった。歯痛や肩こりは少しましになったとの事。私のプレゼントの花がキャスターつきのカバンにさしてあった。スイセンが水不足で花をゆらせていた。笠木さんたちを見送った後、さあ実作をと思いきや、まだまだオリコン（オリジナルコンサート）の続きであった。西本さんは、還暦の歌の歌詞作りが頭一杯らしい。私は高校2年生（17歳）の時に作詞作曲して、歌ってきた、「あの人」と「小さな幸せ」の楽譜化を考えている。

夕食は6時から、会席風のごちそうが並ぶ。思わず、ビール1本を注文する。前の人も含め、3人でコップ一杯ずつ飲む。その後、7時から実作へ入る。西本さんはうつむいて、作文から入り、作詞へ。私は藤村先生に歌を聴いてもらい、音譜化してもらった。15分くらいで出来あがり、20枚をマスプリする。感謝！ヤレヤレ。次の曲は「和司物語」の作詞に入る。西本さんは、作詞に没頭している。（写真参照）

私は気分を変えて、大浴場へ行き、体中を洗う。あがって、カンビールを購入、持参のつまみで、喉(のど)をうるおす。西本さんの運び入れてくれたシンセサイザーで音を捜す人達。集団創作で、東京全国うたごえ祭典に向けてギター伴奏でうたうグループあり。又こちらではノートパソコンを駆使して、「ゾウに負けないアリの歌」を作る人たちと、活気とさわがしさにあふれる部屋。ビールを飲む私をやっと顔をあげた西本さんが、

「ごっつい飲んどる。余裕やなあ」

という。私は歌の歌詞は、身体中に思いあふれて、こぼれた時、言葉が湧いて来るので、その時を待っているのに・・・・。とひとりで思う。「和司物語」は3番まで出来た。夜の10時をまわっている。西本さんは、やっと歌詞が1番、2番とすすんでいる。目がしょぼつくらしい。私はあきらめて、11時前に会場から部屋へもどる。西本さんは徹夜するのだろうか・・・・ＺＺＺＺ。（いびき音）

シリーズⅢ

－　作品発表会と倉敷散策　－

2月24日、最終日の朝は4時半に起きた。カーテンからのぞくと屋根の上に雪らしい。子どものようにはずんで、風呂へ行く。途中、通路にへたりこみ、音譜を書いている女性に会った。千葉から来た人だ。風呂は6時前に入れた。独占湯！。外は雪。泳ぐ、体操する、色々。

朝食を食べていると、西本さんが疲れたようすでやってきた。

「眼がチカチカする。」

という。

午前9時から各自の作った曲の発表会が始まった。ギター伴奏や、シンセサイザーで堂々と歌われる。笑いや拍手や、あいの手が入り、楽しく過ぎていく。（児童文学の合評会はまな板の魚で息がつまる。ミソクソにいわれて、首すじの熱くなる事も多い。メロディがつくとこうも楽しいものか・・・と嬉しくなる。）

西本さんが「還暦の歌」の歌詞を発表する。

まじめで、ユーモアもある歌詞だ。同年齢とおぼしき人たちの拍手喝采。3 番までで、まとまっている。欲をいえば、ことばの香りがほしい。「容姿端麗、あこがれの彼女」というより、「ぼくの高なる胸に、今も変わらぬ黒い瞳の女性」の方が、あこがれを具体化しているカナ。

私の番がきた。22 番目なので、22 歳の気持ちで、「和司物語」の歌詞発表。皆はメッセージソングが多いと思った。おまけで、私が作詞作曲（17 歳当時）した「あの人」と「小さな幸せ」を歌った。「ゾウ列車がやってきた」の藤村先生（作曲家）が手書きで譜面にして下さった。感謝！

53 人で 23 曲がうまれた。すごい！宿題もかかえ、有意義で楽しかった創作合宿はすんだ。帰りに倉敷の観光を足速くすませた。

おみやげ一杯買って、105 円のさぬきうどんを食べて、夕方 4 時頃に自宅へ到着。西本団長は神戸へ東走。帰りは遅くなりそうだ。

来年はやまびこのメンバーや興味のある団員もどうぞ、一緒に行きましょう

シリーズ　追加文

－　笠木透さんの講演　～歌った以上そのように生きろ～　より(骨子)　－

笠木透は 1937 年に岐阜県恵那郡岩川村生まれ。「60 年安保」を岐阜大学生として闘った。教員、出版社々員を経て、フリーに。約 30 年間に 800 曲の歌をつくり出している。

ウッディ・ガスリー(米)はフォークシンガーの父といわれるが、1900 年代のアメリカで活躍。笠木さんは彼を尊敬している。

歌の歌詞(ことば)は大切だ。方言は心を伝える言葉である。詩はそれを必要としている人のものだ。誰に聴かせたい歌なのか。上からの目線で歌詞をつくらない事が大切。

1910 年、日本は韓国併合した。侵略していき、朝鮮語をうばい、日本語を押しつけた。一つの国を徹底して侵略していくやり方、力(ちから)による支配。かつてコロンブスが「新大陸発見」といって、アメリカへ侵略していった。インディアンが原住民として住んでいたのに、力で白人がのさばっていった。アジアで、日本人だけがこのおろかな白人のやり方をまねた。朝鮮語やハングル文字をうばい、日本語やひらがな、漢字を押しつけていった。

この時、韓国の民衆はどんな闘い方をしたか。1919 年から、朝鮮人は独立運動を始めた。集会の自由や思想の自由をうばわれても、小学校では校長は日本人、先生たちは朝鮮人なので、自分たちの作った歌を昼休みや放課後に、小声でうたって伝え、家の父母やオモニたちに歌って聴かせよとという運動を続けた。いずこからか黙して集まった多くの人達は、ただ、「万歳(マンセイ)！」と叫んだ。それで、「独立をかちとるぞ！」とシュプレヒコールした意味だ。

21 世紀の今、日本には「日本国憲法」があり、九条では非戦の誓いをしている。民衆の事を笠木さんは「無国の民」と呼んでいる。大切な情報は良い友達からしか伝わらない。マスメディアの 99%は体制側にたつ情報しか知らさない。だから、全国うたごえの仲間の創作活動は大きくいえば、日本の進路にかかわる。憲法九条を世界の九条へしていく事。

どんな困難があろうと、作り続け、歌い続けていただきたい。希望を現実にしていく時代がうまれていくのだから、日本のうたごえ協議会が唯一、そのメッセージを発信できる所だから、あきらめずに続けてほしい。

民衆の側にたつ歌づくり。民衆の心をつかむ曲作りが大事な点だ。文化をつくる運動はひとりの天才がうみ出すものじゃない。皆で作っていく、多くの曲の中から一つの曲がヒットするわけ。創作する者はハングリーになって、ゼロになってほしい。すばらしい作品(曲)はそこから生まれる。